

赤井 二人

いつも母は言っていた。

正しく生きましよう。

どんなに苦しくても、つらくても、真っすぐに生きましよう。

一度、どうしてと母に聞いたことがある。

母は俺を強く抱きしめた。

なにも言わず、強く、抱きしめた。

母さんは、温かかった。

生まれたときから父はいない。二人だけの貧しい生活。なにもない生活ではあったが、そこに不満はなかった。

寂しいとき、つらいとき、いつも俺の頭をなでてくれる母の手はゴツゴツしていた。その感触と、母の笑顔がなによりも俺の心を支えてくれた。

それは雪の振る日のことだった。買い物の帰り、二人で手をつないで歩いているとき。

「プレゼントはなにがいいの？」

クリスマスを前にして、母が尋ねた。

分かっていたはずだった。望んではいけないと。願ってはいけないと。

それなのに、俺は求めてしまった。

「新しいセーターが欲しい」

母の編んでくれたセーター。もうボロボロになってしまったこのセーターが嫌だったわけじゃない。

ただ、いつか見たあの光景が目に焼きついていて。

俺と同じくらいのガキが、父と母、二人に手をつながれて。真新しいセーターに身を包んだそいつが堪らなくうらやましくて。ついそんなこ

とを言ってしまった。

母は、そうねと、静かにうなずいた。

俺は、そんな母さんの顔を見ることができなかった。

聖なる夜は賛美歌に包まれていた。

人は皆、家族と愛を確かめあい、お互いを祝福した。

クリスマスに教会で配られたパンを持って俺は家に帰った。なにがあるわけじゃない。それでも、この日を母とともに祝いたかった。

息を切らしてドアを開けると、そこには赤い印がぽつぽつと続いていた。その先には、血にまみれて倒れた母の姿があった。

われを忘れて母に駆け寄る。

顔はひどく腫れ、口からは血を流している。俺は、ただ、震えながら母に声をかけることしかできなかった。

血に染まったセーターを抱いた母は、小さな声で何度もつぶやいた。

ごめんね、ごめんね、と。

後で聞いた話によると、店先に飾ってあったセーターに手を出してしまったらしい。馬鹿で愚かなガキのために。

その結果がこれだ。憂さ晴らしを兼ねての暴行を受けて、ボロ雑巾のようにされて投げ出された。

求めてはいけなかったのだ。

求めてしまえば、きつこうなると分かっていたのに。

俺は母を抱きしめた。いつもなら、母も俺を抱きしめてくれた。

だが、そこにもはやぬくもりはない。

世は光にあふれ、人々は愛を詠い、世界は祝福に包まれる。

ならば、この命は、失われるべくして失われたというのか。

だとしたら。

——呪われろ。

なにもかも。人も世界も、神でさえも。

そして、俺自身も。

右手が重い。歩くだけで一苦労だ。

賭博場の稼ぎ。札束が山と突っ込まれたかばんを片手に、薄暗い裏通りをえっちらおっちら。

まったく、この中身からどれだけが俺の懐に入るのか。考えるだけでむなしくなるね。

母を失い、一人ぼっちになった俺はほどなくして地元のギャングに転がり込んだ。食っていくには、生きていくにはこれしかなかった。

さいわいにして俺は要領がよかった。

他の同い年の連中が使い潰されていく中でどうにかこうにか生きてこられた。とは言え、遅かれ早かれってことに変わりはない。

まったく明日が見えないってのはつらいもんだ。

「待ってよー」

後ろから間の抜けた声がする。

しかし鈍臭い女だ。

ガキの頃から見知った顔だったが、別にそんな仲がよかったわけじゃなかった。そのくせ、俺がここに拾われたときになぜかこいつもついてきた。

知り合いならってことでこいつと組まされたわけだが、まったく迷惑な話だね。

だいたい、手ぶらのお前がなんで俺よりちんたらしてるんだよ。

かばんを降ろしてため息をつく。

ふと目を足元に向けると、くしゃくしゃになったペーパーが転がっている。少しばかり気になる記事が見えたので拾い上げて目を通す。

——闇夜に輝く正義の仮面。

酔狂な人間もいたもんだ。

なんでも、白い仮面の正義の味方が悪党退治に精を出してるとか。

聞いた話によると、夜に裏通りを歩いていると暗がりのなかから薄っす

ら白い仮面がぼうっと出てきて心臓に悪いらしい。まあ、出くわしてしまったら心臓に悪いじゃすまないんだが。

世間はその正義をたたえながらも、本心では畏れていた。こんな世の中で、そんなまねができるのは真の狂人でしかないと知っているからだ。

それでも、俺は、その狂人に憧れを抱いていた。

正しい道を歩むことの困難さを、正しくあろうとすることの無意味さを知っているから。

ろくな人間じゃあないとは思うが、その意思の強さは本物なのだろう。

「やっと追いついた！」

振り返ると、こいつ膝に手を付いて息を切らしてやがる。

まったくすっつろい女だ。よくここまで生きてこられたなしかし。

「ねーねー早くこれ持って帰って休も！　だって今日はクリスマスだよ！」

俺としてもとつとこの糞重たいかばんをどうにかしたいんだが、一体誰のせいでもたついているのかお前は少し考えた方がいいな。

しかし、そういや、今日はクリスマスか。忘れていた、というよりは考えないようにしていたのか。どうにも昔の、あの日の夜を思い出してしまうから。

……クリスマスか。今までクリスマスってどうやって過ごしていたのかな。

あまり、覚えてない。

今でこそそれなりに認められてはいるが、少し前まではいつ死んでもおかしくない鉄砲玉だった。こんなことを考える余裕もなかったからな。

それはそれで、嫌なことを思い出さずに、考えずに済んでよかったのかもしれないが。

ということは、今年はこいつと過ごすのかね。

なんかこいつその気まんまんみたいだし、まあそうなるのか。

隣で一人勝手に今日の予定がどうこう言ってる馬鹿を尻目に俺たちのアジトにたどり着いた。

僻地に立てられた、ボスの馬鹿でかい屋敷を前にして歩みを止める。

なにか変だ。

そう、静か過ぎる。嫌な感じの静かさだ。

そして、屋敷のなかからあがる怒声と発砲音。

俺は、見た。

窓に映る白い仮面を。装飾華美な剣を振るう白き姿を。

あいつだ。あいつが来たんだ。

俺は震える左手をコートポケットに突っ込む。

あの日、俺が認められた証としてもらった一丁の銃。小さな銃だが、こいつが俺の力の証。こいつを握ると、折れそうな心が奮い立つ。

だが、あくまでも握るだけだ。

こいつを抜くような状況になってちゃ、命がいくつあっても足りやしない。あくまでも握るだけ。忍ばせておくれだ。

こんなものでも、すぐれるものがあるだけマシな方さ。

ポケットから手を出し、強く拳を握り、開く。ガタガタ震えてる場合じゃないよな。

俺は隣でおろおろとしているそいつの手を取り走り出した。

そう、これは救いなんだ。

糞みたいな未来との決別。

これだけのことが起こったんだ、ここいらは間違いなく大混乱になる。そうとも、若造二人が姿を消したところで誰も気にはしない。

この金を持って、俺は人生をやり直すんだ。

こいつと一緒に。

こいつ、馬鹿な女だよ。

母さんが死んで震えていた俺の側に、ずっといてくれたのはこいつだった。

今もずっと、俺の側にいてくれる。

まったく、馬鹿な女だよな。

だから、こいつと一緒に、俺はやり直すんだ。あの頃のように、誰かと過ごす幸せな時間を俺は取り戻すんだ。

走りながら、つないだ手を強く握った。

息を切らせながら、こいつも俺の手を強く握り返してくれた。  
それが、うれしかった。

白き仮面は見逃しはしなかった。  
儂き迷える二つの命を。

とりあえず俺のアパートに駆け込む。だが、のんびりとはしてられない。あくまでもごたごたを利用するのであって巻き込まれたんじゃ堪らない。

考えることは山とあるぞ。

この街からの脱出経路、その後の展望、もしもの用意も必要だ。

……なんだ？お前、なに見てるんだ。青い顔して。

後ろから寒い風が首筋を冷やす。この感じは何度かあった。命のやり取りの前には、決まってこんな風が吹いていた。

左手をポケットに突っ込んで、ゆっくりと後ろを振り向く。

白いコートに身を包んだ、白き仮面の執行者。

滴る剣を携えたそれは、俺にはとてもじゃないが正義の使者には見えなかった。

それは、悪魔的ななにか。

迷う必要はない。

こいつは殺していい。殺さなければならない。

それなのに、分かっているのに、理解しているのに。

腕の震えが止まらない。人を殺したこともない半端者の覚悟なんてこんなものなのかよ。

……クソッタレ。

「うおおおおおおお！！」

自然と叫びが漏れる。押しつぶされそうな弱い心の防衛本能だろうか。

一気に銃を抜いて、構えて、トリガーを引く。

たったそれだけで終わる。

終わるはずだったのに、神は違う結末を望んだ。

銃を抜き、やつに向けて構え——そこを柄頭で払われる。

人間ってのはこんなにも早く動けるものなのか。

弾かれ転がり落ちた銃につかの間の意識を向けたほんの一瞬。神速の踏み込みからみぞおちへ二撃目の膝蹴りがたたき込まれる。

景色が、飛ぶ。

混沌とする意識が俺に立っていることを許さない。

崩れ落ちる俺を見下ろすその仮面は、笑っていた。無表情に笑っていやがるんだ。

こいつは、正義の味方なんかじゃない。あいつらと同じだ。

弱者に力を行使することに喜びを見いだす、呪われるべき存在だ。

騎士はゆっくりと演技めいた動作で剣を振り上げる。目の前の咎人へたたき降ろすために。

だが、裁きはくだらなかった。

白き仮面は気だるげに、楽しげに構えを解き後ろを振り向く。

その視線は、一人の少女へ向けられた。

震える足で、震える手で、銃を構えるその少女に。

……馬鹿だな。

なんでそこにいるんだよ。

なんで逃げなかったんだよ。

せっかく、俺が死ぬ前にお前のためになにかしてやれたと思ったのによ。

これじゃあなんの意味もないじゃないか。

ほんと、馬鹿な女だよな。

世界が歪む。

心が消えていく。

消えゆく意識の中で最後に見たのは、俺が、愛した人の、最期の姿だった。

寒い夜だ。

いつの日だったか、母は言っていた。

悪いことをすると、本当に大切なものを失ってしまうと。

ならば。

これ以上失うものなど、もうないのなら。

震える寒さで意識が戻る。

もう目覚めることなどないと思っていたが。いや、目覚める必要などなかった。

そうすれば、胸を貫かれ、血に染まったそれを見ることもなかったのだから。

これが正義なのか。こんなものが正義だというのか。

世間はたたえるのだろう。

白き仮面の正義の味方と。

俺たちを、命を、嘲笑いながらもてあそぶあいつのことをたたえるのだろう。

そうか、そうなのか。

正しいこととは、正義とは。

それは力だ。

力を行使する姿こそが、人間のあるべき、正しい姿なんだ。

もとより、命とはどうやって生まれる。

たった一つの精子が形を成すために、無数の精子を蹴落として命となるのだ。生まれる前から、命はそういうふうで作られているんだ。

だから、間違っただけはいなかったんだ。

俺がああ正義の味方に憧れたことは、なにも間違っただけじゃなかった。

——歪んでいる。なにもかも。

覚束ない足取りでふらふらとしていると、足になにかが当たる。

白い仮面だ。

あれは、たしかハロウィンだったか。

あの馬鹿がこれを被って家に来たときはなにごとかと思ったっけか。

決別の日だ。

人々は聖夜に歌う。

誕生の歌を。

地元の大物が死んで情勢は混迷を極めていた。

動くには好都合だ。持ち出した金を元手に行動を起こした。

そして知ったのは、人を使うってのは存外簡単だってことだった。

人間なんてのは少しの暴力と金と、心の奥で求めているものを少しくすぐってやるだけで思い通りに動く。

そして、欲しいものを手に入れることはもっと簡単だった。ほんの少し力を使うだけで、望んだものがなんでも手に入った。

なんでもは言いすぎか。

本当に欲しかったものはもう二度と手に入らないのだから。

……こんな何年も前のことを今更思い出すのも、今日があの日だからなんだろう。

雪の振る外を窓から見下ろしながら、部下にいれさせたコーヒーをすすする。

ふと、首筋を肌寒い風が吹き抜けた。

「おい、おい。ちょっと待て」

ドアノブに手をかけようとしていた部下に声をかける。

はいなんでしょう、と振り返るそいつに、机の引き出しから取り出した小包を投げつける。

「サンタさんからのプレゼントだ。ありがたく頂戴しておけよ」

困惑している部下を尻目に机からカメラを取り出す。記念の写真を撮ると言うのと、苦笑いしながらドアの前に立った。

……そういえばこいつ、家族いたっけか？

そんなことを思いながら、シャッターを切る。

刹那、綺麗な包装のその箱が爆発した。轟音と閃光に包まれた男は細切れの肉片となって飛び散る。

これは掃除に時間がかかりそうだ。

「なんだ、俺からのプレゼントは受け取ってもらえなかったか」

弾けとんだ扉の向こう側につぶやく。俺の言葉に応えるように薄暗い廊下の上から白い影が降り立つ。

天井にでも張り付いてしのいだのか。闇のなかから白い仮面が現れる。

「ふ～ん、その様子だとかご不満のようね。興を凝らしてみたんだが、残念だよ」

いつから宗旨替えしたのか知らないが、こいつはどうもにも無駄な殺生とやらがお嫌いになったらしい。

気にいらないね。まったく気にいらない。

世間体を気にしているとは思えないが、お前はそんなやつじゃないだろう。

だいたい、必要最低限とはいえ結局は殺してるんだからそんな変わらないだろ。もっと自分に素直になればいいものを。

ゆっくりと左手をポケットに突っ込む。

銃を握る手は、震えはしなかった。

とても穏やかだ。

心に波風ひとつ立たない。

それは待ち望んでいたからだろう。

今日という日が来ることを。

俺という力を、より強い力が打ち倒す日を。

お前が、俺を殺しに来る今日を。

それが正義なのだから。

一気に銃を抜いて、構えて、トリガーを引く。

あの日とは違う。銃声が鳴り響き、弾丸は放たれた。

……やるじゃん、俺。

満足した笑みを仮面で覆いながら、胸を一突きにされた俺は仰向けにぱったりと倒れた。

銃弾は、仮面の横をかすめていった。まあ、あの日に比べたら上出来だろう。

しかしなんだ。俺はこんなにも満ち足りているというのに、なんでだよ。

なんでお前はそんなツラしているんだ。

笑えよ。嘲笑え。俺を笑え。

——すまない。

こいつは、なにを言っているんだ。

お前が言うべきことは、そんな言葉じゃないはずだ。

暴力に酔え。殺戮に喜びを見いだせ。

その仮面を狂気で歪ませてみろ。

あの日のように。

なぜ、なにゆえに。

……そうか。そうだったよな。お前、正義の味方だったっけ。

なら、俺みたいなの死に哀れみを持ってやるのも仕事のひとつだったっけな。

なんだよ。やっぱり、お前に憧れたの、間違いじゃなかったんだな。

俺の死は祝われるべき、正しい死なんだ。

これが、本当に正しいってことなんだ。

人々は歌う。

歓喜の歌を。

——merry christmas, my dear hero.

俺は歌う。

正義の歌を。

——僕は、正義の味方なんかじゃないよ。

幸せな日々は、突然に終わりを告げた。

父と母と三人で手をつないで歩いていたあの日の夜。

暗がりのなかから飛び出した男が僕を殴り飛ばす。壁にたたきつけられ、倒れる僕の傍らで銃声が響き渡る。

気づいたときには、僕は一人ぼっちだった。

それからの僕には憎しみしかなかった。

毎夜夢に見る。あの男の顔を。薄れゆく意識の中で見た、血を流し倒れる父の傍らで母を汚すあの男の邪悪な笑みを。

その度に、朝目覚める度に、僕の心をふつつつと黒いものが満たしていった。

そんなある日だった。

人通りのない夜の裏道で僕は見た。

少女に暴行を加え、服を剥ぎ、わが物にしようとしている下卑た男を。

欠片の躊躇も迷いもなかった。

後ろから男につかみ掛かり、力任せに地面にたたきつける。

なにが起こったのだと驚く男に馬乗りになって、その薄汚い顔面に拳をたたき落した。

最初は鼻の骨が折れた。血や鼻水で両手を汚しながらも、拳を振り下ろし続けた。振り下ろす度に男の顔面は破壊されていった。

うめき声ひとつあげない肉のサンドバックとなった男をどれだけ殴り続けたのだろうか。

火照った体を夜風が包む。少女の姿は既にそこにはなかった。

僕は人を殺したのだ。

罪悪感がなかったわけではない。法を犯したことへの恐怖がなかったわけではない。

それ以上に僕の心は満たされていたのだ。あの日以来、こんなに晴れやかな気分になったことはない。

軽い足取りで帰路につく。

その夜は悪夢にうなされることもなかった、

あれから何日もたった。

覚悟は決めていたつもりだが、どうにも様子が変わる。

今の時代、こんな簡単な事件は少し調べれば誰が誰を殺したかなんてすぐに分かるものだ。それなのに一向に僕の元へ警察が来ることはなかった。

不思議に思いながらも、それから僕も、夜な夜な出歩いては屑共を処理して歩いた。

少し出歩くだけでこんな奴らと出会えるなんて、この世界は異常過ぎる。

そんなある日の昼下がり。ある事件を捜査してる若い警官と話す機会があった。

何日か前に始末した薄汚い浮浪者のことについてそれとなく触れてみた。

犯人はまだ見つかってないのかと。

それがなにか問題なのかい？

町中に蔓延る悪党が死んだところで、誰が困るんだい？

彼の答えは以外でもあり納得できるものでもあった。

調べてみると、どうにもこれは昔からのようだ。

この警察はよほどの大ごとにもならなければ、この程度の事件を本腰を入れて捜査はしない。誰もそれを求めないからだ。

町中のゴミを掃除した人間に感謝こそすれど、憎む人間はいない。

むしろ、人々は求めているのだ。

ならば、迷うことなどない。

僕は、この家に伝わる家宝の剣を手にした。

昔、父がよく話してくれた。騎士の家系である我が家に残されたこの剣の話。

騎士として正義のために勇気を持って戦い、その功績としてこの剣を授けられた祖先の話。

この剣こそが正義の証であり、それをふるって戦うことこそが正義の戦いなのだ。

白いコートに身を包み、白い仮面で心を覆う。

白と決めていた。

穢れのない色。

純粹な色。

白は僕にとってもっとも正しい色。

僕は自分を正義の体現者と信じて疑わなかった。

正義をかざして剣を振るう。世界は僕をたたえ、奴らは僕に恐怖した。

気づいていなかったのか。気づかぬふりをしていたのか。

手にした剣で肉を断つ感触に、僕は喜びを見いだしていた。

あれはさめざめと雪の降る日だった。

いつものように、慣れた手つきで首をはねる。

やはりこれが一番いい。これが一番、断罪という感じがする。

恐怖に引きつる表情で転がる首を眺めるたびにそう思う。

そして、今日は運がいい。

こそこそと逃げ出すネズミを見つけられた。

やはり罪人はこうあるべきだ。己の罪に恐怖し、後悔してこそその咎人なのだ。

逃げる彼らを追いかける。

なにを思い彼らは走るのか。明日を、未来を、希望を思い走るのか。

ならば奪おう。

お前たちにそれは相応しくはない。

たたき伏せられたこの男は僕になにを奪われるのか。

だが、実にいい顔をしている。怖くて悔しくて、堪らないのだろう。

ああ、堪らない。

心が黒く黒く満たされていく。

そして今、けなげにも愚かにも立ち向かう道を選んだこの勇気ある女

性に剣を突き立てる。

手に伝わる肉を貫く感触が、力を行使する喜びが、僕の全てを包んでいく。

——どうしてお前がそこにいる？

鏡が心を写すのなら。

仮面で顔は覆えても、歪んだ心は隠せない。

それはたまたま、偶然のことだった。化粧台の鏡に映る自分の姿を見てしまったのは。

笑っていた。

仮面が歪み、笑っていたんだ、

もうずっと見ていなかったのに。記憶の片隅に追いやったはずなのに。

白い仮面は笑っていた。

あの日の夜の男のように。

僕は逃げ出した。

その場から、自分自身から。

——逃げられるものか。

鏡に映る男がつぶやいた。

変わったのではない。始めからそうだったただけだ。

正義のため、平和のためと欺瞞に自分を欺いていただけ。

内なる声を世間の称賛でかき消して、己のどす黒い欲望を満たしていただけ。

だが、突きつけられてしまった以上、今までのように目をそむけることはできない。

ああ、畜生。

どうしてこんなことになってしまったんだ。

あんなことがなければ。

このままなにも知らない振りして、なんの後ろめたさも感じずに気持ちいいままでいられた。絶頂のままでいられたんだ。

剣を握るたびに仮面は卑しく笑うだろう。

だが、心を満たす術を知ってしまった以上、もはや剣を捨てることはできない。

結局は、僕も同じだったのだ。

アレルヤ、アレルヤ。

地と天に讃美の声、響き渡る。

彼はなぜ、この仮面を被ったのだろうか。

今でも鏡を見るたびに、白い仮面は笑っている。

仮面はなにを笑うのか。

不必要な殺しはしないという、そんな甘えた縛りを嘲笑うのか。

何を今更と笑うのだろうか。

殺しに是も否もない。

僕だってこんなくだらないことで善人ぶろうとは思わない。

それでも、こんなルールで己を縛らなければ、僕は、完全に堕ちてしまうから。

社会は僕を正義と持てはやし、彼らを悪とはやし立てる。なにも変わらないというのに。

あの男となにも変わりはない。奪うことでしか満たされることはないのだ。

この男もそうだったのだろうか。

奪うことでしか満たされないというのなら、全てを奪われた今、彼はなにを思うのか。

死者に聞いても分かるまい。

罪の連鎖が人と人をつなぐのならば、いつかその日が来るだろう。

しかし、なんと安らかな笑みを浮かべているのだ。

白い仮面が笑っている。

彼もまた、見えぬなにかに縛られていたのか。歪む心を仮面で覆うこ

とでしか生きられなかったのか。

ならば望むまい。

仮面の下の涙を、白日のもとにさらされることは。

首を、はねる。

白い仮面が並んで揺れて、闇の中へ消えていく。

白銀の夜に、誰がために鐘は鳴る。